

NUPRI NEWS

Nagano Urban Policy Research Institute

NPO法人
長野都市経営研究所

Vol.73

2026.APR.

発行日/2026年4月28日 (年4回)

NPO法人 長野都市経営研究所

発行/NPO法人 長野都市経営研究所 〒380-0834 長野市大字鶴賀問御所町1289-1 丸本ビル2F TEL 026-235-7911 FAX 026-235-6166 https://www.nupri.or.jp E-mail: nupri@nupri.or.jp



鷲澤幸一 理事長

理事長あいさつ

■さまざまなる取り組みで
活性化を推進

理事の皆様には、お忙しいところお集まりいただき誠に感謝申し上げます。また、日頃からNUPRIの活動にご理解とご協力をいただきありがとうございます。

さて、イタリアではミラノ・コレティナ冬季オリンピックが開催されており、スキージャンプ女子の丸山希選手をはじめ県勢の活躍に大きな期待と注目が寄せられています。実は、私は長野冬季オリンピックが開催される2年前にコレティナ・ダンペンツォ地方を視察訪問しています。3回ほど訪れましたが、大変素晴らしいリゾート地でした。イタリアでのメダルセレモニーで思い出したのは、長野冬季オリンピックのジャンプ団体表彰式です。船木選手らがセントラルスクウェアに登場、金メダルを受け取る盛大な拍手が巻き起こり、会場一体となって歓喜に包まれたことを昨日のこのように思い出します。セントラルスクウェアの表彰式会場

祝電

長野市長 荻原健司様より

NPO法人長野都市経営研究所 全体懇談会のご盛会を心からお喜び申し上げます。関係各位の並々ならぬご尽力に敬意を表しますとともに、皆様方の今後ますますのご健勝と一層のご活躍をお祈りいたします。

令和8年2月12日、「NUPRI全体懇談会」がホテル国際21にて開催されました。役員・会員合わせて約40名のご臨席を賜り、各部署の活動報告と今後の指針、展望について説明が行われました。

折しも、ミラノ・コレティナ冬季オリンピックでは、野沢温泉村出身の丸山希選手がスキージャンプで銅メダルを獲得したばかりとあつ

て、長野冬季オリンピックでのNUPRI活動を振り返るとともに、地域に貢献する役割を再確認する場となりました。

会場を移して、まつもと市民芸術館の芸術監督団团长である木ノ下裕一氏の講演会を開催。その後の懇親会では、和やかな雰囲気の中、長野市の活性化について有意義な議論が交わされました。

NUPRI 全体懇談会

令和8年2月12日
午後2時30分～
ホテル国際21にて開催

未来への希望を胸に 長野のまちづくりを積極的に推進

各部会中間活動報告と 今後の活動方針

■産学連携部会

県内企業の魅力をアピール



掛谷嘉則理事

長野県立大学とさまざまな連携を進めており、わいがやサロンとのコラボレーション企画で講義を実施しました。11月13日には、「今後の長野を担う、地域人材育成とは」をテーマにディスカッションを、11月26日には「小布施堂の戦略」と題して市村次夫氏に講義をしていただき、学生12名を含めた18名でディスカッションを行いました。長野県立大学の学生7割が県外企業に就職するという現状を鑑み、県内企業の魅力を知ってもらい、1人でも多くの学生に県内企業に就職してもらうために企画しています。

■「い」掘れ！長野調査隊

「善光寺界限 赤地蔵参拝コース」

竜野泰一 副理事長／調査隊長



今回は2年ぶりに民間信仰を訪ねて「赤地蔵巡り」を企画しました。善光寺界限には、一度見たら忘れられない真つ赤な姿をしたお地蔵さま「赤地蔵」が点在しています。長野郷土史研究会会長の小林一郎先生のご案内で、4箇所の赤地蔵を巡りました。福德を民衆に与える赤地蔵について多くのことを知ることができた楽しい企画でした。NUPRIのホームページでも紹介していますので、ぜひご覧いただければと思います。

■「まちの奥見」活動

「アンダー30枠」で若い参加者を

鈴木隆治 副理事長／事務局長

5月10日(土)と10月4日(土)にまち歩きイベント「まちの奥見」を開催しました。門前を着物姿で歩きつつ、由緒あるお店



や寺社の「奥」を見させていただきながら、店主のお話に耳を傾けることで門前まち・長野の奥深さを再確認していただくことを主眼としています。参加者にアンケートを取ったところ評判も上々でしたので、内容の充実を図りたいと思います。新しい取り組みとして「アンダー30枠」を設け、30代7名の方にご参加いただきました。長野の奥深い魅力を知っていただくために、細く長く続けていきたいと思っておりますのでご協力の程よろしくお願いたします。

■中心市街地活性化部会

未来のまちを創造

倉石智典 事務局長

長野市では、令和8年4月から5カ年計画で「第三期長野市中心市街地活性化基本計画」を推進する予定となっております。中心市街地の幾つかの課題に対して基本的な方針、目標指標が掲げられ、「住みたくなるまち」「生きがいを感じるまち」「訪れたくなるまち」「歩きたくなる



まち」を目指しています。中心市街地活性化協議会の主催で移住者相談会を開催したり、空き店舗などを改修したゲストハウスもオープンする予定です。長野駅前では、JR東日本の旧社宅を滞在型施設に活用する取り組みも始まっています。NUPRIでも長野市や長野商工会議所、まちづくり長野と定期的な意見交換を行い、具体策を提言していきたいと考えています。



■わいがやサロン活動部会

会員の交流機会を増やし活性化へ

岩野彰 相談役



掛谷さんのお話にもありましたが、産学連携部会とのコラボレーションも含め、昨年は3回のわいがやサロンを開催しました。事務局としましては、各部会の積極的な取り組み・事業は頼もしく、今後もしも若い力をお借りしながら、価値ある改革を進めていきたいと思えます。

■新産業創出部会

農業から地域とのつながりを考える

竹内伊吉 理事

りんごの木オーナー制度は26回目を迎えて、11月22日(土)には収穫祭が行われました。また、「三水米」の生産・販売も行い、以前より好評な売れゆきです。昨年度は、生産者の高齢化、後継者問題、農業問題(りんごの木の手入れ等)と、改めて考えさせられる1年でした。さまざま

な課題に正面から向き合わなければならぬ時期に来ており、地域、個人という問題も原点に立ち戻り、取り組んでいきたいと考えています。

■スポーツ振興活動部会

長野市を夏合宿の舞台に

鷲澤幸一 理事長



AC長野パルセイロトップチームは、9勝8分け21敗で過去最低の19位に沈み辛うじてJ3に残留しました。一方のレディースチームは、令和8年3月3日現在、2勝2分け12敗で12位という成績です。

今年度は、Jリーグにとって大きな転換期であり、今までの「春秋制」から「春秋制」へと本格移行します。今現在行われている「百年構想リーグ」は6月で閉幕となります。6月にシーズンが終わりますと、今年度は7月から各チームの合宿がスタートします。昨年までのシーズンオフは九州キャンプが多かったのですが、冷涼な長野に来てくれる可能性が高まりま

した。飯綱高原にはサッカーグラウンド2面が新設される予定で、長野市でも夏合宿の誘致に力を入れています。ラグビーの聖地、菅平のように飯綱高原がサッカーの聖地になるようにNUPRIも長野市とともに取り組んでいきたいと考えています。

■地域野球クラブ「信越硬式野球クラブ」の応援活動

今年も東京ドームへ！

喜内久雄 会員

2025年は、アマチュア球界の最高峰である第96回都市対抗野球大会に6年ぶり25回目の出場を果たしました。大会当日の東京ドームには、約3500名の皆様が応援に駆けつけていただき、熱い声援と惜しみない拍手をいただきました。今後選手一人ひとりが持てる力を最大限発揮し、全国大会での勝利を目指します。

シーズンオフには、青少年の育成及び地域貢献活動の一環として行っている小中学生への野球教室や幼稚園、保育園等の園児たちとの交流も計11回開催しました。長野市を代表する強いチームであること、同時に次世代の子供たちに夢と希望を与える存在でありたいと考え活動しています。

■公開講演会開催事業

市民に開かれた講演会

鈴木隆治 副理事長／事務局長

2月の全体懇談会、6月の定時総会において、さまざまな講師を招き講演会を開催しています。こういう方のお話を聞きたいというご要望がありましたら、私や事務局にお寄せください。皆様のご意見・ご要望をお聞きしながら有意義な講演会にしたいと考えています。



NUPRI 講演会

劇場をひらく、
土地をひらく

〜まつもと市民芸術館の

芸術監督をしていて考えたこと〜

講師：木ノ下裕一氏



全体懇談会に続き、まつもと市民芸術館の芸術監督団团长・演劇部門芸術監督の木ノ下裕一氏の講演会が一般公開で開催されました。小学生の時に上方落語に出会ったエピソードから始まり、大学時代に木ノ下歌舞伎を旗揚げ、まつもと市民芸術館の芸術監督団团长に就任した際の話など、伝統芸能に関する内容は機知に富み、時に笑いが起こる和やかな講演会となりました。約90分の講演を抜粋掲載します。

古典芸能との衝撃的な出会いは
小学校3年生

私は和歌山市の生まれで、どちらかというところ田舎町で育ちました。初めての古典芸能との出会いは、小学校3年生の時です。田舎町ですから町内会の活動が盛んで、休日に暇を持て余していた私は近くの公民館で行われていた敬老会にふらりと立ち寄りました。そこでは町内会長が手品を披露したり、おばあちゃん達が五月みどりの「おひまなら来てね」というヒット曲に合わせて踊った

りしていました。いろいろな演目の最後に登場したのがプロの噺家さんでした。落語を初めて聞いた私は、世の中にこんな面白いものがあるのかと衝撃を受けました。その時の衝撃、感動を言語化してみると、たぶんこういうことなんじゃないかと思っています。

私の子供時代はテレビゲームが普及し始めた頃で、アニメやコミックなどカルチャーというところとデジタル重視でした。その一方で落語は、聴覚に重点を置いた芸能です。ビジュアル的には扇子と手ぬぐいがあるだけで、噺に引きこまれると聴覚から想像されるビジュアルがとき

【木ノ下裕一氏】プロフィール

木ノ下歌舞伎主宰。1985年、和歌山市生まれ。小学校3年生の時、上方落語を聞き衝撃を受け、その後、古典芸能への関心を広げつつ現代の舞台芸術を学ぶ。2006年に古典演目上演の補綴（台本の再編集）・監修を自らが行う木ノ下歌舞伎を旗揚げ。代表作に『娘道成寺』『夏祭浪花鑑』『義経千本桜-渡海屋・大物浦-』『糸井版 摂州合邦辻』など。2016年に上演した『勧進帳』の成果に対して、平成28年度文化庁芸術祭新人賞を受賞。第38回（令和元年度）京都府文化賞奨励賞受賞。NHKラジオ第2『おしゃべりな古典教室』のパーソナリティを務めるなど多岐にわたって活動中。まつもと市民芸術館ではこれまでに数々の作品の上演を行うほか、「信州まつもと大歌舞伎」では補綴や作品の解説を行う「歌舞伎ナビ」を開催するなど、松本市との関わりも深い。

放たれ、めくるめく世界が頭の中で展開しました。その興奮は今まで味わったことがないほどで、この日を境に



私は落語少年になつていくわけです。

県民ホールなどで開催される落語会にも行きましたが、子供の小遣いですから何度も見に行けません。お金はないけれど、落語家さんの近くには行きたい。

そこであの手この手と考えました。たとえばボランテイアスタッフとして公共ホールの落語会に参加するとか。小学校では友達に落語の素晴らしさを語るのですが、どうしても伝わりません。そこで見様見真似で落語を覚え、教壇に座つて落語を演じました。「おみくじ亭大吉」という高座名まで付けて学校の人気者になる頃には、最大で12人の弟子が付くようになっていました。この成功体験からわかったことは、自分が面白いと思つたものをそのまま伝えても伝わらないこと。けれど工夫を凝らすと、楽しんでもらえる可能性が広がるということでした。いろいろな人とシェアすることで楽しさは倍増するのだと、学んだ時期でもあります。

落語には、歌舞伎のパロディもたくさん出てきます。そうすると、古典芸能にも興味が湧いてきました。ただ金銭的余裕のない子供でしたから、古典芸能全てを鑑賞することはできません。そこで、小学校では落語に専念して、中学校で歌舞伎、高校で文楽、そして大学生になったら能・狂言を見ようと将来設計を立てました。概ね、その通りに設計プランは実行されています。

興味が無い人にも届けたい 古典芸能をアップデート

大学に入り木ノ下歌舞伎を旗揚げし、今年でちょうど20周年を迎えます。木ノ下歌舞伎では、俳優が洋服で演じたり、あるいは邦楽ではなくJポップを流したりと、古典芸能を現代劇にアップデートした演出を施して上演しています。歌舞伎って難しい、興味が湧かないと思つている人にも面白いと思つてもらえるように、古典芸能の潜在的な魅力を伝えたいと考えています。そういうことでは、子供の頃とやっていることはなんら変わらないといえるかもしれません。

さて、2020年のことですが、松本市のまつもと市民芸術館から芸術監督をしませんかというお誘いを受けました。ちょうどコロナ禍で、演劇業界も上演が次々と中止されるなど大打撃を受け始めた頃です。エンタメは不要不急といわれ、無理をして上演した劇団が世間からバッシングを浴びたこともありました。それに反発するように、いや演劇は不要不急のものではないという論調も出てきました。その時に私は、演劇が何かの役に立つという論調は、とても危険だと感じました。つまり、何かの役に立っていったものは、役に立たなくなった瞬間にすぐに切り捨てられる。そのしっぺ返しに心配でした。

もう一つ考えたのは、コロナ禍で舞台を見たくても見られないお客様のことでした。でも、コロナ以前でも病氣の方や介護が必要な方、あるいは経済的な事情で劇場に行けない人もいたわけです。その時、私はそういう方々に思いを馳せたことがあったらどうかと思いました。自分の足で劇場に来て、チケット代が払える方だけをお客様として見ていたのではないかと深く反省しました。

その頃、自粛期間中に私は『更級日記』を読んでいました。これは、菅原孝標女すがわらのたかすけのむすめが書いた日記文学の最高傑作ですが、その中にこんな話が出てきます。孝標女が娘時

代に疫病が流行り、母親のように慕っていた乳母までもが亡くなってしまいます。孝標女は、鬱状態になるほど嘆き悲しみました。それを見かねた実の母親に、源氏物語を手渡され、読み進めるうちに、どんな気力が出てきて物語に没頭していきます。孝標女は、「げにおのづから慰みゆく」、つまり「本当に傷が癒されていく心地がした」と書いてあります。心の自然治癒力ですね。私は、ああなるほど、文化芸術とはこういうものだなと思えました。未曾有の災害とか疫病とか、人が本当に苦しい時には、文化芸術はなんの力にもなれないのかもしれない。まずは衣食住、医療や福祉の充実が最優先です。しかし、人が少しづつ立ち直ろうとする時、心がちょっと浮上しようと頑張っている時、文化芸術は真の力を発揮するのではないかと。内面から癒していく、慰めになるのです。そして、自分が主宰する木ノ下歌舞伎のことを鑑みたわけです。個人が主宰する団体だけど、木ノ下歌舞伎にも公共性があるはずだ。いろいろな人を慰め癒せるような可能性がある木ノ下歌舞伎で、公共性というものを考えたいと。そういう時に芸術監督のお話をいただき、快くお引き受けしました。



スローガンは、「ひらいていく劇場」

まつもと市民芸術館の芸術監督は、全国的にも珍しい体制を取っています。一般的には1人のアーティストなどが一つの劇場の芸術監督を務めることが多いのですが、まつもと市民芸術館では3人で芸術団を組織しています。私は「演劇部門」で、「舞踊部門」には演出家でダンサーの倉田翠さん、「音楽部門」と「ゼネラルアートアドバイザー」として俳優の石丸幹二さんが入り、この3人で運営しています。

スローガンは、「ひらいていく劇場」です。「ひらいていく」というのは、いろいろな方に文化芸術を届けたい、どんどんひらいていきたいと、そういう思いが込められています。3人それぞれにひらいていく関心は違いますが、劇場の魅力を伝えたいという思いは一緒です。例えば、倉田翠さんは、松本少年刑務所まで出向き、受刑者にコンテンポラリーダンスを教えています。自分の内から湧き上がってきた感情をダンスに変換していくという非常にユニークな活動で、毎年入部希望者が殺到して困っているくらい人気です。今年は、この刑務所のクラブ活動で経験したことや考えたことを基にして、まつもと市民芸術館でダンス作品を上演します。出演者はプロのダンサーや俳優ですが、タイトルは『娑婆 身体表現クラブ』、実に秀逸です。倉田さんはいつか受刑者と一緒に作品を作ってみたいとも言っています。

石丸幹二さんは、どこにひらこうとしているかという点と病院です。病院に向いてミニコンサートを開催したいと仰っているので、今年はぜひ実現したいと思っています。また、松本市の楽団ケ・セラさんの定期演奏会にもゲスト出演するなど、メンバー一人ひとりと熱心にコミュニケーションを取り、一緒に練習を重ねていきたいと思います。

私は、視覚や聴覚に不安のある方もお楽しみいただけます。

る古典芸能の企画に取り組んでいます。「これまで、能楽師が語る小泉八雲の「耳なし芳一」に字幕を付けたり、見えない方に向けて事前に舞台の説明をしたりしました。」これは視覚障がい者の方に大変好評で、「すごく面白かった」「自分たちを反映した姿がこういう作品に残っていることに感動する」など多くの感想が寄せられました。

「今年は、落語に手話通訳をつけたり、長野県在住でござ歌（盲目の女旅芸人が歌った歌）を伝承されてらっしゃる広沢里枝子さんをお呼びして、障害の有無にかかわらず楽しめる工夫をいろいろと実施します（2026年2月「ひらく古典のトビラ其の五」として実施）。

公共ホールには、中間共同体としての役割がある

松本市にある劇場をどうひらいていくかという課題では、土地に対してもひらいていかなければいけないです。その点では、私が大事にしていることが3つあります。1つは、その土地の気質や風土、個性を「尊重する」と。2つ目は、「顔を見る」こと。お客様の顔を思い浮かべながら作品をつくることが重要です。そして3つ目は、「つなげる」。お客様の関心や興味を違う場所へつなげていく、そういう仕事が公共ホールはできると思っています。

そしてまた公共ホールの使命は、中間共同体の役割を担うことだとも考えています。家族という小さな共同体があり、県や国などの大きな共同体があり、その間では地域を担う中間共同体というものがたくさん機能しています。それが、現代社会では縮小しているように思えます。

最初にお話ししたように、私は町内会という場所で偶然にも落語に出会い、そこから古典芸能への世界が開か

れました。そういうように町内会や公共ホールでのボランティア活動などの中間共同体に育んでもらった実感があります。

芝居の語源は、何かご存知でしょうか。昔は、芝居は野外で行われていました。舞台は上で、芝には観客が座っていました。だから芝に居る、つまり日本の演劇史においては観客が主体なのです。ですから、公共ホールも芝の上にいる人たちを支えなければいけない。そういう中間共同体にならないといけないのではないかと、日々活動している次第です。

本日は最後まで熱心にご清聴いただき、誠にありがとうございました。

